



西村久蔵とキリスト村建設

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学旭川分校障害児教育研究室 公開日: 2017-07-26 キーワード: 作成者: 谷本, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007802

西村久蔵とキリスト村建設

谷本直子*

西村久蔵（1898年—1953年）は、北海道小樽に生まれる。久蔵が生きつづけた時代は、まさしく戦前と戦後の動乱時期でもあった。その中において久蔵は熱心な伝道者であり、教育者であり、洋菓子のニシムラ食品工業株式会社の創立者でもあった。この多方面にわたる経歴から、多くの人々に献身的な感化と影響を与えている。久蔵を慕う人々は、慈愛の人、寛容の人、受容の人として敬愛している。

しかしながら久蔵は、クリスチャンであり戦争に参加したという罪の贖いから、戦後まもなく江別の地に相互扶助を目的としたキリスト村建設に生涯をかけたが、志半ばにして倒れ、その実現を見るに至らなかったのである。教育者として、人間として一番の根本問題を提唱しつづけた西村久蔵の生き方に学びながら、キリスト村建設とは、一体何か、についてふれるとともに、その建設が、貧困者、病を得た人々、等々の人間の生活に根ざした共に生きる場としての、福祉・教育構想であると、とらえてみた。（キーワード：村づくり：共同体：福祉）

1. はじめに

私が本研究を手掛けることになったきっかけは、「100円ケーキの店」として、市民から親しまれているキヨスク（前、鉄道弘済会道支部）の「聴覚障害者の店」に働く聴覚障害をもった店員（女性）が、数々の障害を乗り越えて自立の道をめざす姿にノーマライゼーションの本質がある」という講義を受けた時からである。100円ケーキを提供したのは、西村食品株式会社であり創立者は、西村久蔵であった。

彼は熱心なクリスチャンで、戦後農村伝道を行った折、私の家に宿泊されたことがあった。当時小学生であった私はやさしいまなざしをたたえ、大きな体の中に誰をも差別なく受容できる心の広さと、暖かみのある人柄を今でもわすれることができない。久蔵亡き後35年をへた今日、会社が「聴覚障害者の店」にケーキを提供している事実と、私の心の中にある久蔵の忘れがたい面影とが重なり、研究の課題としてとりあげた。

特に戦争参加への悔い改めから出発したキリスト村に焦点をしばり、久蔵の生き方に学びながら、キリスト村建設の今日的意義が、生きるすべての人の指針になればと考えている。

2. 西村久蔵の略歴

1898年（明治31年5月1日）
父、伸夫、母カクの長男として、小樽に生まれる。
1916年（大正5年）
18才で札幌北辰教会（現、日本キリスト教会札幌北1条教会）にて受洗する。
1918年（大正7年）
小樽高商（現、小樽商科大学）に入学
1923年（大正12年）
札幌商業学校教諭として奉職
1929年（昭和4年）
教諭の傍ら家業としてパンと洋菓子店の経営を始める。100円ケーキ提供の母体をつくる。
“教育は感化である”との信念をもち、多くの人材を育てる。福音の伝道、禁酒禁煙運動のため路傍説教をする。

3. 方 法

久蔵が召天されてから30年後、彼を慕う教え子達の手によって刊行された「人生の深淵に立ちて—西村久蔵の伝道と思想—」は、課題追求にあたり貴重な資料となった。この遺稿集は、生前久蔵が知人や家族に宛てた手紙や、講演内容を収めたものであり、私も実際に自筆の講演内容を書き納めたノートや、手紙を目のあたりにして、久蔵の生き方や考え方を知る上で参考になった。

この遺稿集をもとにして、①教育の面 ②事業の面 ③伝道の面 ④行政の面 ⑤キリスト村建設の面の5項目をとりあげ、それぞれの立場に係わった人達による見聞と資料収集に努めた。この中から ⑤キリスト村建設の面（生きとし生けるものの生活の面）をとりあげ、収集した資料をもとに、久蔵の構想した村づくりについて考察する。

4. 結果と問題提起

久蔵は、終戦時を奈良の地で迎えている。主計大尉の立場から残務整理後、国内にありながら10月31日に札幌に戻る。帰宅しての第一声が「キリスト村を建設」するであり、「北満に農民として集団移住した人々を迎える地は、北海道にしか求められない。そして必要な食料を

1937年（昭和12年7月）
主計少尉として、出征する。
1942年（昭和17年7月）
推されて北海道議会議員となる。
1943年（昭和18年4月）
再度召集、北千島幌筵島に出征
1945年（昭和20年8月15日）
終戦を、主計大尉として、奈良駐屯地で迎える。10月末に、復員、キリスト者として平和に徹せず戦争に参加したことを悔いて、キリスト村建設を企画する。
1946年（昭和21年）
新日本建設運動、道内各地の教会、病院、各種団体の伝道説教、講演に全力をつくす。
1948年（昭和23年）
江別郊外にキリスト村建設を計画して実行する。
1953年（昭和28年）
過労のため召天する。
（先天性高血圧大動脈弁閉塞不全症）

*北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程

瓶に静置して、上澄を飲みました。

いくらなんでもこんな高位泥炭地で、畑作不能な土地でしたが、札幌に近いし、排水客土すると肥料は、土地自身が持っているというので、それを頼りに、やっと少しの小豆と、ジャガイモ、カボチャの収穫を得ました。

こうしているうちに、道庁の方にもわかってもらえ、幌向原野（江別太、豊幌、東野幌、三重川向、中樹林、夕張太）3千町歩をキリスト村に許されました。

希望者は、この各地を歩いて、自分でよいと思った土地をえらび、各自、10町歩程を得ることが出来ました。

入植となった時、進駐軍のドッジ氏の意見で、「そんな不毛の地に入ることは、人命無視、許可出来ぬ」とのお達しで、選ばれた20人程の人々は、補助もなしでは、どうしようもないので断念してしまい、それぞれの身寄りを尋ねてはなればなれになりました。』と語る。

一家が入地した家屋は、かつて営農者が放棄した崩れかけた空屋を改造したもので、ランプの下で泥炭の茶色の水を飲み、不馴れな農耕に従事する有様は、言語に絶するものであった。この頃の社会状況もあり、キリスト村は進展をみるに至らなかった。

開墾の困難さの他に久蔵は、農村伝道のために、各地を歩いている。

その地より、有馬純氏（現、北星大学学長）にあてた手紙に「私は、あなたがたやその子たちに、日本への期待をもって、残る20年の生涯をキリスト村建設の礎に捧げんと6月10日にこの地（江別太）に参ったのです。

私の子供達にも幼いときからこの苦勞の多い泥炭地の水を飲ませ、風にさらして雄々しくたくましいものになりたいと願った訳であります。愛と平和は、ただ実践の苦勞から生まれることを信じるものであります。』⁹⁾と書き、愛と平和は十字架の道から生まれ、キリストの永遠の生きる道であるとも説いている。

久蔵は、戦争で尊い人命が奪われたことを、身をもって体験している。このキリスト村建設は、まさに多くの人々が生きること、すなわち命の尊厳さと労働と相互扶助の中で、実現したものであった。

しかしながら、国の認可と補償が長引けば、長引くほど諸経費は重み、久蔵は、家屋、店舗を担保に入れて莫大な借金を背負いこんだ。そうした苦境で倒れたその時、戦争によって生死の中をさまよい、遺体となった乳児に乳をふくませていた放心状態の母親達、引揚のさなかに親子の別離に泣きさけぶ子供の声、銃弾をあびて不自由な体になった人々、職をさがして、あてもなくさまよう傷夷軍人等々の顔が、久蔵の頭の中を走馬燈のようによぎった。

「こんなはずではなかった。キリスト村の構想は、戦争によってしいたげられた人達、貧困者、障害者、病人達を、ことごとく受け入れ、教会を中心とした神の福音

と祈りによって支えられた村づくりであったはずだ。

学校や病院、図書館などの文化施設のほかに、店舗加工工業、農機具工場などの産業施設の建設ではなかったのか、実現のあかつきには、ミレーの晩鐘をおもわせるようなチャペルと田園の相互扶助によって成される、愛と平和の郷ではなかったのか」（歌夫人の証言より）無念の声をあげその実現が、出来なかったことを叫びつけていた。

(3) 離村

医者の診断は「先天性高血圧大動脈弁閉塞不全症）であり、久蔵の体も限界を超えていた。

ついに江別の地を去らざるをえない日がやって来た。去り行く家族のために、キリスト村では、ささやかな集まりがもたれた。

現在、旭川に住み、キリスト村入植者であった、赤羽知純、宮夫妻は、「先生一家が離村されると聞きたただ悲しかったです。遠くに住んでいる、私共によく見えるように、赤い旗を棒に立てた日は、お風呂を沸かした合図で、一番先にお風呂に入れてくださいました。まさか体の不調で去るとは思いませんでした。

やさしく、よく気がつかれおもしろいのあるお人柄の先生でした」と、しみじみと語り当時をなつかしんでいる。

久蔵は、どんな時にでも笑顔をみせ、その病気に気づく人は少なかった。江別の地を離れても、行政機関の働きかけ、キリスト村への訪れ、久蔵を頼って来る人達への対応などで休まる暇もなく、この頃から病院伝道活動を始め久蔵の寛容さと慈しむ心に多くの人が生きる望みを与えられていた。久蔵の伝記を書いた、愛の鬼才の著者、三浦綾子氏もこの時の出会いで信仰の道に入っている。久蔵が離村した昭和26年から2年後、死の2ヶ月前、時任正夫氏（現、北星学園理事長）に「もうぼくにはただ一つのことしかない。キリストの十字架だけだよ」の言葉を残し、昭和28年7月12日召天した。

(4) 耕作会館

久蔵の亡き後のキリスト村は、歌夫人を中心に樋浦誠氏（当時、酪農学園大学学長）を委員長として継承されたが、1953年、道の方針で江別太地区に一般入植者も入り、キリスト村は酪農を主にしていたが、道の方針で水田計画が持ちあがり、冷害でも保証金が出るからとの魅力もあって水田経営に移ったキリスト村入植者の軒数が多く、こうして苦勞して耕作した畑にジャージャー水を入れられ、当初の計画はくずれてしまいキリスト村は、自然消滅となった。久蔵の戦争協力の懺悔とその苦悩の戦いの中で生まれたキリスト村は、日の目を見るに至らなかったが、当時の入植者達は貧しく苦しい生活であったものの「西村先生を中心に、お互いに助け合い励まし合っただけの生活は、心のやすらぎの日々をおぼえた」と述

懐する。久蔵の生き方は、さまざまなかたちとなり、感化と影響を与えている。久蔵の手によって建てられた、耕作会館（キリスト教会）は冬期間、遠路に通学困難の子供達への教場となり、その後、下の月小学校³⁾の母体となった。戦前戦後の混乱期、彼は今の社会に全くないもの、それは正直、純潔、愛、無私であると説いている。それを裏づけるかのように、ヤミ屋が横行し、梅毒が流行し、娘を金にかえ、正直者は馬鹿を見る世相であった。現に売りどばされようとした娘が、久蔵の出会いにより、いたわりと励ましを心の拠り所として、今も元気に余生を送っている。

長男洋平氏は「おやじは、無条件に満洲や樺太からの引揚者を受け入れ、宿屋のようでした。もちろん無料の宿屋です。とにかく頼って来る人を皆受け入れていたわけです。病人もいれば、傷病者の方もいました。仕事のない人はそのまま店で働いていました。困った人を見過ごしにできない性分でしたね」と語っている。まさしくカソリックの修道女達の手でなされた、巡礼者、旅行者、貧しい人々、浮浪者、そして病を得た人、身体の不自由な人、さまざまな障害をもった人を歓待する家、Hospiceそのものであった。



学校の校舎となった耕作会館

工場にも、行き場のない人々が、集まり店を手伝い、それぞれの家族を養う賃金を久蔵は支払っていた。

その中には、働くことが困難な人もおり、障害に悩む人もいた。店のお金を持ち出す非行の人もいたが、久蔵は責めたり、憎んだことは、一度もなく許す心をもっていった。「宿を求めて来た者を、絶対に拒否してはならぬ。」が、西村家における至上命令であった。

禁酒禁煙運動の路傍運動も、命を尊ぶ久蔵の行動のあらわれである。

(5) 聴覚障害者の店

西村食品株式会社の現社長は、沢村重一氏であり、氏は、青年時代を西村家の一員として共にくらし、感化と影響を一番受けている。

久蔵亡き後、氏を中心に、彼を偲ぶ従業員、感化を受けた人々の手によって、西村食品は大きな発展をとげた。氏は、聴覚障害児早期発見、早期療育事業を推進する礎ずえとなった一人でもある。

9名の障害者が西村の工場で働き、賃金、諸条件も一般職員と同等である。昭和51年に発足した、キヨスクの“聴覚障害者の店”は、聴覚障害を持つ女性店員（20代）を中心に聴覚障害者の職場開拓を旨としたものであり、

店舗は、札幌市内に5店、15人の障害者が販売に従事している。雇用条件は、一般職員と同じである。

経営は、キヨスク、札幌市、西村食品会社の三社による協力のたまものであり、久蔵のキリスト村に描いていた相互扶助の理念が、聴覚障害者の店づくりの一助となって、沢村氏の手によってみごとに継承されていた。

氏は、『赤字覚悟の洋菓子提供であったが、西村先生の「企業を通じて世に奉仕すること、よい品物を安く、そして親切に扱うこと、このような企業を社会もまた捨てない」との信条に支えられ守り抜いた。』と語っている。

戦争参加への罪に苦悩した教育者であった頃、生徒の死に直面し、やすらぎを与えることのできなかつた自責の念から、教育者にとって、人間にとって、一番の根本問題は、生死の問題であると訴えつつもいる。

久蔵に出会った多くの人々は「骨身を削り、自らを虐げて人に与え、人に尽くした。人を憎むことをせず、人を怨むことが出来ず、悉く人を愛し、人を信じ、人を責めることなく許されました。」（沢村重一氏の弔辞より）と言わしめたのは、彼自身の生き方と共に神の十字架によって生かされた信仰の強さと、寛容と受容の精神そのもののあらわれであったとみることができる。

5. おわりに

この一年間、戦後の混乱期、戦争に参加した罪の贖いから、理想郷とも平和の郷ともいわれ、今日でいう福祉の村ともいえるキリスト村に命をかけた西村久蔵の生き方に学んでみた。資料収集でも戦後の混乱のため、あきらかにすべき必要不可欠な部分が見つからず、そのためキリスト村に迫るいま一步の問題と共に、今後の課題として残されているものが多い。また、その追求のために、江別周辺に足を運び、現在まだ江別に住まわれている、当時の入植者の方に聞きとり等の調査研究をつづけることが、キリスト村構想解明の鍵になると考えられる。

本稿を作成にあたり多くの方に協力を頂いた。上野勇次郎、菊地正一、志賀嫩子、戸谷太通三、宮崎武彦、沼田進の諸氏、沢村重一社長、赤羽知純、宮夫妻、西村歌夫人、福島恒雄牧師、各諸氏に謝意を申し上げます。

注

- 1) 賀川豊彦は、労働運動の祖、生協組合の生み親であり、葦合新川の貧民屈生活を送る。
- 2) 人生の深淵に立ちて—西村久蔵の伝道と思想—西村久蔵先生遺稿集刊行委員会、代表 沢村重一(1982) 556
- 3) 江別市立下の月小学校閉校記念事業協賛会(1980)